JAFスポーツWEB

2018年JAF全日本ダートトライアル選手権第9戦　NANO TOP カップダートトライアルinタカタ［JAF公認No.2018-4028］

開催日：10月6～7日　開催場所：テクニックステージタカタ　格式：国内　主催：CCN［クラブ登録No.加盟35005］、TTS［クラブ登録No.加盟34031］

フォト＆レポート／ JAFスポーツ編集部

最終戦、得意とする準ホームコース、タカタで圧巻の走りを見せたPN2細木智矢選手が2年連続のチャンピオンを獲得。

PN2決戦を制した細木智矢スイフトがV2を達成！

2018年の全日本ダートトライアル選手権最終戦は広島の高速サーキット、テクニックステージタカタを舞台として10月第1週に行われた。タカタでの最終戦は3年連続となる。

広島県の北部、安芸高田市にあるテクニックステージタカタは弓状にしなった広大な敷地に、多彩なコーナーを用意するグラベルサーキット。高低差もあり、それが高い速度を乗せたまま飛び込む下りや上りコーナーの設定を可能にするため、ドライバーには高い技術が求められ、観戦する者には十分な迫力をもたらす。今回もコース全体をフルに使ったダイナミックなレイアウトが用意され、最も見応えのある高速で駆け抜けるS字コーナーでは各選手の限界ギリギリの走りにギャラリーが酔いしれていた。

今回の最終戦にチャンピオン決定戦が持ち込まれたのはPN2とSC2の2クラス。PN2クラスはともにZC33Sスイフトターボに乗る細木智矢、宝田ケンシローという次代の全日本ダートラを背負って立つ若手二人の激突となった。

注目のヒート1でベストタイムを奪ったのはやはりスイフトターボに乗る河石潤選手。ただ一人、2分の壁を破る1分59秒434をマークする。宝田選手が2分0秒678で続き、0.004秒差で細木選手が3番手につけた。ヒート1から超僅差のバトルを演じた二人だが、タカタでは、天候が崩れない限りはヒート1のタイムで勝敗が決することはまずない。ヒート1を走った選手達によって砂や砂利、小石が掃かれたライン上に顔を出した硬い路面を、ヒート2、ドライ用タイヤで最も攻め切ったドライバーに勝利が転がり込むのがタカタの定番なのだ。

セオリー通り、ヒート2に入ると各選手が続々とタイムアップを遂げ、PN2も宝田選手のひとつ前のゼッケンで走った九州の今村宏臣選手が59秒267を出してベストを塗り替える。だがADVANのドライタイヤ053をチョイスした、続く宝田選手はその暫定ベストを一気に3秒以上も縮める56秒053をマーク。しかしその驚愕のベストに会場がどよめいたのもつかの間、続くゼッケンの細木選手は55秒309をマーク。二人の対決は細木選手に軍配が上がる。ラスト5台のシード勢はいずれもこのタイムに肉薄することは叶わず、細木選手がそのまま逃げ切って2年連続のチャンピオンを決めた。

「細木君は2本めもウェットタイヤで来ると思ったけど、ウェットであのタイムを出してくるとは思わなかった。自分もミスもなくて思った以上のタイムが出せたのでイケたと思

Dクラス／1.2.3. 地元広島の川崎勝己選手（1.2）がチャンピオン確定済みの谷田川敏幸選手（3）を2戦連続で下す快挙を達成した。4.宮入友秀選手はひとつ順位を落として3位で最終戦を終えた。

PN1&PN2 ／ ***5.6.*** PN1は上野倫広選手がヒート1の3位から逆転勝ち。「自分の中ではベストの走りができたと思います。年間で3勝は初めてなのでこの勢いを来年に繋げていきたい」。***7.*** CR-Zで孤軍奮闘のPN1児島泰選手はヒート1の順位を守って2位。***8.*** 宝田ケンシロー選手は2位にとどまり、PN2初タイトルはならず。***9.*** 最終戦決戦を制した細木選手はチャンピオンボードを高々と掲げた。***10.*** PN2のヒート1でトップタイムを奪った河石潤選手だったが逆転を許し、3位にとどまった。***11.*** 青森から遠征の佐藤卓也選手は持ち前のアグレッシブな走りでPN1・3位に入賞した。

N1&N2 ／ ***12.*** 九州から遠征のN1濱口雅昭選手はヒート1の5位から3位へジャンプアップ。***13.*** N2角皆昭久選手は3位に入り、第5戦に次ぐ表彰台獲得。***14.15.*** チャンピオン確定済みのN1岡翔太選手は逆転で6連勝を飾ってシーズンを締め括った。***16.*** N2は北條倫史選手がシーズン5勝めを飾って有終の美。***17.*** 2位入賞のN2矢本裕之選手は3戦連続の表彰台を射止めた。***18.*** 中国地区戦チャンプを決めた川本圭祐選手はヒート1、首位を奪うも2位に甘んじた。

ったんですが、今日はもう仕様がないですね」と宝田選手。「僕は完璧に走れたつもりだけど、細木君が本人が納得できる走りをしたんでしょう。やっぱり今年は開発が遅れたのが最後まで響きましたね。細木君に教えてもらったくらい、遅れてしまったんで。オフはテストしたいことがたくさんあるのでクルマを手元に置いてしっかり煮詰めますよ」とリベンジを誓った。

一方、定石破りのウェットタイヤ、DUNLOPの74Rで勝負に出た細木選手は、「半地元ともいえるコースなので、練習会でもよくあるレイアウトだったのでそれ程は困らなかった」と振り返った。「ただ当然、練習の時とは路面が全然違ってくるので、今日も1本めに路面に足をすくわれた所があったんです。砂利や砂が掃けてる所と掃けてない所の見分けもハイスピードになるほど見分けが難しかったんですが、それが1本めで分かったので砂利の掃け方をデータとして集積して2本めを走りました。

自分は広いラインで高い車速を維持したいので、ちょっと砂利に乗ってもバランス崩さない、しっかりストッピングパワーもあってトラクションも稼げる74にしたんです。砂利を見越した上で、ボトムスピードを落とさない自分のラインで走れたことがタイムに繋がったと思います。今年は自分が苦労した、というよりも、周りの皆さんが本当に苦労して、このクルマをスタートラインに立たせてくれた。自分はもうそれに応えるしかない、という気持で走った一年でした。結果で恩返しすることができてホントに良かったです」と胸をなでおろしていた。

タイトルレースが持ち込まれたもうひとつのクラス、SC2は田口勝彦選手が前日の公開練習からの好調をキープして、同じ中国地区の名手、梶岡悟選手の追撃を許さず、2年ぶりに王座に返り咲いた。ヒート1でただ一人、1分46秒台にタイムを乗せた田口選手はヒート2でさらに0.6秒タイムを詰めてトップの座を守った。梶岡選手はヒート2で46秒台に乗せるも、結果的には0.7秒及ばず、2位に甘んじた。ヒート2後半区間は互角のタイムをマークしただけに、前半区間でのこの0.7秒というロスを取り返せなかったことが響いた。

「1本めからスーパードライタイヤの036で行ってそのタイム見て、2本めのタイヤを決めるつもりだったんです。その1本めが自分としては微妙なタイムだったんだけど、036で行って、1本めミスったところを修正すればタイムアッ

SA1&SA2 ／ ***19.*** RWD勢最上位で今季初表彰台を射止めた横内由充選手。***20.*** SA2王者確定の鎌田卓麻選手は僅差の2位に甘んじた。***21.22.***「こういう高速コースはアクセラにはピッタリ。今年一年でクルマが凄く良くなってどこでも戦える感触を掴めたので来季はチャンプ狙いたいですね」。SA1は崎山晶選手がマツダのお膝元で快勝。***23.24.***「最後の最後にきっちり決めることができて良かった。来年もこのクラスを盛り上げたいね」。SA2は北村和浩選手がシーズン2勝めを上げ、ランキングも2位を守った。***25.*** 大きく順位を上げたが2位にとどまったSA1小山健一選手。***26.*** 今季3度めの2位獲得のSA2マイケル・ティー選手。

SC1&SC2 ／ ***27.28.***「最後も勝てて5連勝で終れて最高の一年。中盤までセッティングで苦労したけど、中盤からクルマが決まったのが一番の勝因かな」。2年連続でSC1王者に就いた山崎迅人選手。***29.*** 3位に入ったSC2上村智也選手はシリーズランキングも3位に浮上。***30.*** SC1で3位入賞の小川英二選手。***31.*** 小川選手とWエントリーの鈴鹿浩昭選手が2位に入賞。***32.*** SC2梶岡悟選手は2位にとどまり、連覇はならず。***33.34.*** レースウィークで絶好調だったSC2田口勝彦選手が見事タイトルを奪還した。

プするんじゃないかと思ってその通り、修正できたのが勝因かな。2本めは036でも思ったより滑ったんで、路面的には0.5秒くらい落ちてもおかしくない路面だったと思うけど、1本めから036で行って、滑る感覚に慣れておいたのが良かったと思う。まぁでも今年はドライの053でも036でもどっちでも行けるクルマに決められたのが大きかった。土曜にタイムが出れば日曜がどうなろうと余裕が持てたからね」

その田口選手は2019年はいよいよDクラスに移籍する。2018年も全日本を追う傍ら、NEWマシンの熟成に時間を割いただけに、開幕戦でベールを脱ぐ満を持して投入するそのスーパーDマシンのスピードは注目を集めそうだ。

そしてそのDクラスではオーバーオールウィンをめぐる僅差のバトルが演じられた。ヒート1のベストはチャンピオン確定の谷田川敏幸選手。1分45秒475をマークした谷田川選手に0.2秒差で同じ関東の宮入友秀選手が続き、ホームコースで前戦今庄からの連勝を狙う地元広島の川崎勝己選手が3番手につけた。

注目のヒート2。SC1クラスあたりから顕著になったタイムが拮抗する傾向はこのクラスに入っても続いて、タイムアップはおろか、タイムダウンを喫するドライバーも現れる。シード6台を残す時点でも谷田川選手のタイムは更新されなかったが、川崎選手が44秒528でベストを塗り替える。宮入選手はまさかの47秒台にとどまり、続くシード勢も46秒を超えられない。最終走者の谷田川選手は中間では川崎選手を0.1秒上回ったが、最終タイムは44秒664と逆転はならず。今庄で復活の狼煙を上げた川崎選手が再び激戦区を制した。

「2本め勝負と踏んで1本めは新品の036 を温存したんですが、2本めも、スリッピーでラインの上に乗せられなかったので番外と思ったんですよ。だから意外というか、皆さんも難しい路面だったんでしょうね。

でも今庄は谷田川さんがスピンしてくれたおかげで勝てたんですけど今回はしっかり走りきってもらった谷田川さんに勝てたんで嬉しいです。まだ昔の感覚が戻らなくて、引き出しが錆びついているんですけど(笑)、来年はもっと成績を残したいですね」と川崎選手。2019年のDクラス、NEWカマーを待ち受けるドライバー達も強者揃いだ。